

デイルタイにおける歴史的理性批判の構想(二)

——歴史内在主義のアポリア——

水野建雄

一

デイルタイはその八十年近くの生涯のうちで、膨大な量の哲学的歴史的心理学的解釈学的著作、論稿を残したが、そこに、それらの作品を貫いて全体的統一を与えている理念がある。それは「歴史的理性批判」(Kritik der historischen Vernunft)の構想である。一八八三年に発表された最初の名著『精神科学序説』(以下『序説』と略記)は、その起草の時代に「新しい理性批判」の課題の必要性が語られ、またこの作品冒頭のヨルク伯への献辞にも述べられているように、もともと歴史的理性批判という表題のもとに構想されたものであった。この『序説』第一巻序文の中で、デイルタイは続けて第二巻を発表することを予告している。これは全二巻の大部の著作になるはずのものであった。第一巻は「個々の精神科学の概観」と「精神科学の基礎としての形而上学」の二部から成り、第二巻は、その予告によれば、「現代までの認識論の労作の叙述と評価」と「精神科学の認識論的基礎づけ」を含むはずのものであった。ところが、この第二巻はプランはほぼ完成していたといわれるが、しかし実際には中断し遂に刊行されるには到らなかった。これ以後のデイルタイの研究は、この第二巻の主テーマである「精神科学の認識論的基礎づけ」をめぐる、これを完成させるための準備研究という意味をもつとみなすことができる。『序説』刊行のほぼ十年後に『記述的分析的心理学の構想』(一八九四年、以下、心理学論稿と略記)が発表されるまでの期間を、『序説』第二巻の資料収集の時期とみなす説(G・ミッシュ)もあり、またこれ以後の諸著作も、「本来の認識論的構想と結びついていて、『序説』第一巻第二巻と共に、その端初が一層拡大され完成されていく思想過程に密接に關係している」とみなしうるとすれば、『序説』以後のほぼ全作品、研究は、この『序説』あるいは歴史的

理性批判の構想を続行し完成するための補完と考えることもできる。最晩年の作品『精神科学における歴史的世界の構成』(一九一〇年、以下『構成』と略記)の中で、ディルタイは、彼が精神科学の方法論的根拠とした体験、表現、理解の三つの構造を語るに先立って、もう一度くり返して、自分の課題が歴史的理性批判と名づけられるべきものであることを語っている(G.S. VII. 191)ことをみても、歴史的理性批判は、ディルタイの思想生涯全体の核心をなす中心テーマであったといえるのである。B・グレーテュイゼンは次のように語っている。「結局ディルタイ全集の全巻は、総合表題、すなわち精神科学序説もしくは歴史的理性批判という表題をつけることができる」(G.S. VII. V)。しかしながらこの基本構想は、『構成』論文およびその周辺の草稿論文において一応の結実をみたとはいえ、なお完全な形では実現されないままに終わった。

ところで『序説』から心理学論考に到る時期と、この論稿以後『構成』に到る時期との間には、精神科学の基礎づけをめぐって、或る思想的転換があるといわれる。それは簡単にいえば、心理学的基礎づけの構想から、心理学に対する懐疑とそれの克服への転換である。そして、ディルタイが心理学的基礎づけの限界を自覚し心理学を克服して、晩年の『構成』論文において歴史的理性批判の大よその輪郭を提示するに到るこの転換の過程で、この基本構想にとりわけ大きな影響を与えたものとして、フッサールとヘーゲルの哲学の受容の問題をとりあげることができるようになる。とくにフッサールの意味論とヘーゲルの「生」の概念の受容である。これがディルタイの構想を新たな形成へと促進しつつ、しかし同時にまた、晩年の構想を特徴づけ、また問題をはらむものにして思うように思う。本稿では、かかる両哲学受容によるディルタイの構想の特殊性と問題点を、主としてフッサール哲学受容を中心にして考えてみたい。

二

ディルタイは一八七〇年頃「私は宗教的性質の人間ではない」として、自分の立場を「歴史的客観性」の立場と特徴づけているように、基本的には科学の実証主義の精神の立場に立っているといえるが、しかしそれはかなり包括的な意味でそういえるのであり、十九世紀後半の所謂科学主義と反科学的理想主義の時代思潮に対してはディルタイ独自の立場を保持しているようにみえる。⁽²⁾ エアマースは前期ベルリン時代のディルタイの立場を、トレンデレンブルクから影響を受けた Idealism の立場だと特徴づけて、それを、意識の構成的役割を重視するがゆえに、唯物論とはならない実在論と、現実の所与に思想を帰せしめるがゆえに主観主義とはなりえない観念論との総合の立場だと説明している。⁽³⁾ こう

した立場は、これ以後のデイルタイの思想をも、根底のところまで規定していたように思われる。

さてデイルタイは、シュライエルマッハーの解釈学、トレンデレンブルクの観念論批判、ランケに代表される歴史学派の歴史認識、さらにはヘルダーやゲーテの「生」の理念に大きな影響を受けつつこれを批判的に摂取して、精神科学の基礎づけの課題を確認していくのであるが、さらに、自己の構想を確かなものにしていくためには、なおとくに十九世紀後半のめまぐるしく変転する思潮と包括的に対決しなければならなかった。ヘーゲル左派の現実的分解以後の唯物論、つまりモーレスコットやビュヒナーに代表される生物学的唯物論、六十年代から七十年代にかけて自然科学のみならず人文、社会科学にまで大きな衝撃を与えたダーウニズム、またリープマン、ランゲなど実証主義の系譜に属する初期新カント学派など、それらの科学的実証主義による形而上学的精神的概念の放逐、すなわち精神と意識の「自然化」の傾向に対して、デイルタイは自ら実証主義の立場に立ちつつも、これを時代の危険な徴候、文化の疎外であるとして、「進歩への最悪の道は、実り豊かな過去の成果と手を切ることだ」(G.S. XI, 69) といつて警告した。また一八七〇年代の後半から次第に強まってくる、実証主義、科学主義への反動、懐疑、すなわちヴィンデルバンドやリッケルトに代表される後期新カント学派や、「十年間モットーとされたアカントに帰れ」が姿を消して、フィヒテ、シェリングに、ヘーゲルに帰れが登場する」(ヴィンデルバンド)とされる、オイケンなどの新理想主義、さらにニーチェやベルグソンなどの生の哲学、これらの主張に対してデイルタイは何ほどか共感を示しつつも、精神の自然化という誤まった科学主義を否定して、その代りに同じ誤まった主観主義を代入することの危険を警告して、これら「暗い感情と主観性の曖昧さ」に対して科学的知識は擁護されねばならないこと(G.S. IV, 200)を説いた。客観主義と主観主義、科学的合理主義と非合理的理想主義といった両極の振幅を揺れ動く、これら近代から現代への過渡期の潮流との対決の中で、デイルタイは自己の立場と構想を検証し、そしてますます基本構想の必要性を確信していった。精神科学の基礎づけという課題にとって、これら思想のうちでもとりわけデイルタイに大きな影響を与えたのは、フェヒナー、ヘルムホルツなどの心理学であった。しかしデイルタイは、彼らの心理学を規定している科学主義、すなわち精神現象を個々の要素に分解して、それを科学的因果関係によって説明する「説明的心理学」(Erklärende Psychologie)を批判して、それに対して、人間の精神生活全体を構造連関として扱う、構造的な「記述的心理学」(Beschreibende Psychologie)を提示する。かかる心理学による精神科学の基礎づけの可能性を問うことが、デイルタイの構想の出発点であった。

ところで精神科学とは、厳密には精神諸科学であり、精神諸科学の基礎づけとは、精神諸科学を成立させる根源的な理性意識の権能と能力限界を吟味し、それによって精神諸科学を学的に基礎づけることを内容としている。これが歴史的理性批判とよばれるのは、ディルタイにおいては生 (Leben) は歴史性においてあり、歴史を通じて認識されるがゆえに、その認識論は純粹、理性批判ではなくて、歴史的、理性批判でなければならぬからである。したがって精神諸科学の基礎づけの課題は、歴史的、理性の権能と妥当範囲を批判、検証することによって、それがいかにして精神諸科学の知の客観性を構成しうるかということである。ディルタイは次のように語っている。「かかる精神的世界は一方では、把握する主観の創造であるが、しかし他方、その精神の運動は精神的世界における客観的知識の獲得をめざしている。かくてわれわれは、主観における精神的世界の構成がいかにして精神的現実の「客観的」知識を可能にしうるか、という課題に直面することになる。私はかつてこの課題を歴史的理性批判と名づけた」(G.S. VII, 191)。深い影響を受けたカントと同じように、認識作用の主観性がいかにして認識内容の普遍妥当的な客観性を獲得するかを理性批判として、しかしカントとちがって、歴史における理性批判として問うことが、ディルタイの課題であった。

ディルタイの理性批判は、歴史を生み出すものが人間の「生」であるがゆえに、生から出発する。生はもちろん生物学的生命でも、プラグマティズムの扱う生活でもなく、また形而上学的意味の宇宙的世界といったものではなく、それは、いわば歴史の根拠ともいべき全体的生である。すなわち、歴史における始源と終末を想定したところから意味づけられたり、先験的な絶対的理念によって規定されたり、あるいは理念のハあらわれVとして構成されたりすることのない、前学問的な「なまのありさま」(Rohzustand)である。「ところで、この生という大いなる事實は、われわれにとって精神科学の出発点であるのみならず、哲学の出発点である。しかし、この事実に対してわれわれがはじめて立ち向うとき、この事実に学問がほどこした加工以前のところに立ち帰り、この事実そのものをなまのありさままで把握することが大切である」(G.S. VII, 131)。さて、この学問以前の生がいかにして学的知にもたらされるかという問いが、ディルタイにおいては、生の内在的自己理解がいかにして普遍的知識としての歴史的経験にまで高められるかという形で問いすめられるのである。この生の分析を、ディルタイはまず心理学的方法において、すなわち生の構造の心理的「内的経験」の事象として扱おうとした。しかし前述したように、この試みは一八九四年の心理学論稿を境にして中断される。

ディルタイにこの試みの中断を余儀なくさせた背景として、ミッシュは次のような事情をあげている。「歴史理論における論理的に熟達した

批判主義の登場、これと並んで……彼の身近かにいる心理学の擁護者から『構想』に加えられた予期せぬ攻撃と、困難の度を増す老年の疲労の徴候への不安などが、これに関係している」(G.S. V, CXVII)。『構想』とは前述『記述的分析的心理学に関する構想』をさすが、この記述的心理学の立場を主張する論文に対して、心理学者エビングハウスから徹底的な批判と攻撃が加えられた。「予期せぬ攻撃」とはこのことをさすが、この批判は「ディルタイに、人間的にも理論的にも深い衝撃を与えるものであった」⁽⁴⁾。他方「批判主義の登場」とは、主としてヴィンデルバンドのディルタイ批判をさす。心理学と歴史理論の両者から、ディルタイがまさしく両者を結合しようとした論理そのものに攻撃が加えられたのである。ディルタイは一方において、現実的生の心理学的抽象によって得られた生の一般形式としての「同形性」(Gleichförmigkeit)と生の生動性との整合性を示すこと、他方で、心的連関がいかに歴史の現実的形態に到達しうるかを示すことを、迫られたのである。それは精神科学の基礎づけという構想の要石にかかわることであった。老年の疲労に加えて、構想の再検討を迫られて、ディルタイはこれ以後一九〇五年頃に改めて自己の構想に着手するまでは十年間「沈黙の時代」を余儀なくされることになる。

このような外的要因に触発されて、ディルタイのうちに心理学的方法への懐疑が、それも新たな心理学の形成のための懐疑ではなく、精神科学の心理学的基礎づけの有効性への疑念が生じてきたはずである。⁽⁵⁾ すなわち(一)体系的歴史的精神科学は、それが確実な成果をあげるために心理学を前提とすべきか否か、(二)学的確実性は心理的事実の分析に依存するか、(三)体験の生動性と心理的事象の概念把握とは、どのように整合するかなど、心理学的方法そのものに対する包括的な問題が生じてきた(G.S. VII, VII)。

さて、いわばこの心理学をめぐるアポリアを打開する契機を与えたのが、フッサールの哲学であった。ディルタイは「沈黙の時代」に、一九〇〇—一九〇一年に発表されたフッサールの『論理学研究』を集中的に研究して、生の構造連関の思想を、生の生動性に関係づけると共に、なおかつ客観性をもちうる生の認識の可能性を、ここに見出すのである。かくて心理学論稿以後「十年後になってはじめて、……フッサールの『論理学研究』の生き生きとした影響もあって、彼は中断していた研究を再開した」(G.S. V, CXVII)。

三

ディルタイが心理学的方法を脱却して以後とりわけ強調するのは、生は「関係」の刻印を受けている、という考え方である。ディルタイの用

語では、これは、「生は「連関」(Zusammenhang)である」ということである。「体験と理解においてわれわれに対して現われるものの総体が、人類を包括する連関としての生である」(G.S, VII, 131)。連関とは、或る存在と或る存在との間の関係や結合作用、結合状態ではなく、結合を成り立たせている結合の根底、つながりそのものである。連関は、諸関係の根底的総体性を表わす概念である。「連関」は後期になってはじめてあらわれる概念では決してないが、実はフッサールの『論理学研究』に出会って、そこに新しい意味がこめられてくるのである。ガダマーはこのことについて、次のように述べている。「フッサールの分析によって、ディルタイははじめて構造を因果連関から区別することを学」び、意識の志向性の説によって、所与性の概念の新しい基礎づけを与えられ、「意識はつねにすでに連関のうちであり、それ自身の存在を連関の思念のうちにもっている」ことの意味の重大さを学んだ。そして、「この作用連関から立ちあらわれてくるところの意味(Bedeutung)の概念を、ディルタイは結局フッサールの『論理学研究』をもって完成したのである」と。所与性と連関、連関それ自体における「意味」の形成を、ディルタイはフッサールに学んだのである。これは、ディルタイにとっては「画期的」意味をもっていた。「私が現実的ないし批判的客観的方向をとる自分の認識論の基礎づけを続行しようとする時、私がかつかり言っておかねばならないことは、認識論の叙述の評価の点で画期的なフッサールの『論理学研究』にどれほど多くのことを負っているかということである」(G.S, VII, 14)。

さて、ディルタイが一九〇七—一九一〇年に書いたとされる(G.S, VII, VI)「知の構造連関」(Der Strukturzusammenhang des Wissens)という論稿は、直接フッサールの意味論に言及している。ディルタイはこの論稿の中で、『論理学研究』第二巻の第一論文「表現と意味」の、とくに「意味志向」(Bedeutungsintentionen)と「意味充実」(Bedeutungserfüllung)をとりあげて、フッサールの言葉を引用しつつそれを展開して以下のように語っている。

表現とは「あらゆる言説および言説の部分であり、またそれと本質的に同種の記号である」(フッサール、論理学研究第二巻三〇頁)。そしてこれら表現は、これが或るものを意味するということによって、他の種類の記号から区別される。「われわれがまず心理学的記述の立場にたてば、意味によって生かされた表現(der sinnbelebte Ausdruck)の具体的現象は一方の、表現がその物理的側面にしたがって構成される、その物理的現象と、他方の、表現に意義(Bedeutung)を与え、場合によっては、直観的充実を与える諸作用に分かれるのであり、そしてこれらの諸作用の中で、表現された対象性への関係が構成されるのである」(論理学研究第二巻三七頁)。表現がこのように対象性に関係す

るかぎり、表現は何かを思念している。表現がこの関係を、現前の、あるいは現前化された直観において、あるいは、体験において遂行するかぎり、名辞と命名されたものとの関係は、「意味充実」の形において実現される（同書第二巻、三八頁）。しかも表現の物理的現象と表現の思念された対象的なものへの関係とは、単なる共在（Zusammen）、同時的なものではなく、内的統一である。その統一の性格をなすのは、われわれは言語表象を体験している間は、単語の表象のうちにはなく、もっぱら単語の意味ないし意味作用の遂行のうちに生きていくということである（三九頁）。われわれの関心は思念された対象に属する。そしてそれは、直観的言語表象から、その機能にしたがって対象に及び、対象を指示する。名辞を名辞が意味する対象に関係づけ、この関係を対応する直観を通して完全に遂行する体験は、したがって一つの統一をなしており、そしてこの統一は、意味の本質のうちにある関係のあり方によって特徴づけられる。（G.S. VII, 39-40）

フッサールにおいては、表現が単なる語音ではなく、「意味（Sinn）」によって生かされた語音である以上、その表現における本質作用が「意味賦与作用」（die Bedeutungsverleihende Akte）ないし「意味志向」とよばれ、また「意味充実作用」あるいは「意味充実」とは、「意味志向を充実し」「それによって表現の対象関係を顕在化する点で、表現に対して論理的に根本的な関係にある作用」であって、「認識統一ないし充実統一という形で意味賦与作用と融合する作用」のことをあらわしている。ガダマーの述べるごとく、フッサールにおいては、意識の志向的対象はいかなる現実的な事実でもなく、イデアルな統一、思念されたものそのものであり、それによって、イデアルな一つの意味という概念が論理的な心理主義の偏見から守られたのであるが、デイルタイは、この分析から、構造は因果連関とは異なり、しかも構造連関が意味概念に結びつくものであることを理解したのである。すなわち、表現は本質的に意味賦与作用もしくは意味志向であり、そしてこの意味志向が、対象性に関係づけられることによって、そのかぎりで意味充実が実現されること、このことが、デイルタイがフッサールから読みとった主題であった。そして、この意味論を自己の「生」の哲学の中に読みこんでいくのである。「デイルタイにとっては、意味は論理的概念ではなく、生の表現として理解される」。したがって意味論は、デイルタイにおいて次のような形で理解されることになるといえる。「生」は、前述のごとく歴史の根拠ともいべき全体的生であり、そしてデイルタイにとって「表現」（Ausdruck）とはこの生の表現であり、したがって「生の客観態」（Objektivierung des Lebens）もしくは「客観的精神」である。それゆえに、表現における意味志向が対象性に関係づけられるとは、生の表現であり

生の部分でもある生の客観態が、この全体的生としての対象性に関係づけられるということである。そして、部分としての生の客観態はつねに全体としての生に関係づけられることによって、意味充実を遂行しようということになる。こうして、生は、部分と全体との関係において意味充実を遂げていく連関＝意味連関として把えられ、生の理解は、全体的生に関係づけられることにおいてますます意味充実を遂行していく、その部分を通して行なわれる。したがって、生はそれ自体連関であり、この生の客観化とは、個別的生の単なる抽象化、普遍化ではなく、意味の充実、意味の形成であり、意味連関の形成である。生は、連関そのもののうちにおいて意味を産出する「創造的生」である。そしてかかる意味形成の所産が生客観態、客観的精神とよばれる。部分の理解が全体にいきつき、また全体に関係づけられることによって部分は意味を形成する。

ディルタイは部分と全体との関係における意味論を、『構成統行計画の第一論文の中で次のように語っている。「意味のカテゴリは、生の諸部分と全体との関係をあらわすが、その関係は生の本質に根拠をもつ」(G.S, VII, 233)」。やむにこのことを文章における単語の意味の関係として、「意味とは、生の中でその諸部分が全体に対して有する特殊な関係の様態である。われわれはこの意味を文章における単語の意味と同じく、記憶や未来の可能性によって認識する」(G.S, VII, 233f)。個々の単語はそれぞれ何らかの規定された意味をもち、それらの結合から文章の意味が導かれるが、しかし文章の意味は個々の単語の意味の単なる集積ではなく、全体としての文章が単語の意味を充実させ、その充実せられた意味が、また文章に作用していく。「全体と部分の間には相互作用が成り立ち、その作用によって意味(Sinn)の未規定性、意味の可能性および個々の単語が規定される」(G.S, VII, 235)。意味の未規定性が規定されることは、全体への関係づけにおける意味の新たな現われのことである。単語と文章の関係と同じように、著者によって表出された、生の客観態としての作品も、つねに全体としての生の連関に関係づけられることによって意味充実を遂げていく。したがって作品の解釈とは、部分の全体への関係づけ、すなわち作品を全体的生の連関に関係づけることによって、作品のうちにたち現われてくる意味連関を理解することである。

生の客観化とは、前述のごとく、単なる個別性の止揚や普遍化ではなく、全体への志向において絶えず意味充実を遂げていく形成であり運動である。したがって、生そのものがかかる連関としての運動であること、それゆえに、精神科学の認識の問題は、つねに意味を充実する(といふことは、生の意味を自己において形成していく)運動の所産としての客観態を認識すること、すなわち生の客観態の構造のうちに働く連関の

認識であることを、ディルタイはフッサールの意味論から自己の精神科学の課題の中にくみ入れたといえるのである。それは端的に部分と全体における「関係」概念の問題であった。ディルタイは精神科学の基礎づけの課題として、「精神科学の領域において、所与にもとづいて普遍的な知識を成立させる連関の一般的性格はどのようなものであるか」(G.S. VII, 120)をあげたのであるが、これは、フッサールの意識のイデアリテートの証明を以上のような意味連関において理解することによって、心理学を克服して解決されうると考えたのである。「精神科学が扱う包括的な事実が生客観態である」(G.S. VII, 148)が、この客観態は生の部分であり、そのかぎり生の固定であるものの、全体的生への関係づけをつねにならなうることから同時に生の生動性を表現し、かつ表現された所産として、そこに、客観的知が可能であるとされるのである。

さて、精神科学のもう一つの課題である「精神的世界の構成」において、この意味連関は「作用連関」(Wirkungszusammenhang)として提示される。「精神的世界を作用連関から生まれたものとして理解する」(G.S. VII, 148)ことによつて、精神的世界は構成される。

作用連関は、生のデュナーミッシュな運動を表わす概念であるが、ディルタイは作用連関の創造的性格について次のように語っている。「精神が作用連関としてあり、把握にもとづいて価値を生み目的を実現するのは、時と場合によつてそうなるということではなく、それこそ精神の構造なのである。私はこれを精神的な作用連関の内在的目的論的性格と呼ぶ」(G.S. VII, 153)。「内在的目的論的」というのは、連関が外部から考え出されたり、構成されたりするのではなく、それ自体において意味を産出する(価値を定立し目的を実現する)創造的性格をもつということである。そしてディルタイは、歴史的世界は個人、文化体系、家族・社会・国家などの外的組織、さらに時代に到るまでその全体が、これら作用連関の世界であると考えるのである。個人は知性、感情、意志の構造連関としてあり、この連関において独自の価値を定立し、目的の実現に向かうが、その個人は、さらに個人を越えたより大きな社会的歴史の連関の中にくみこまれて、「歴史的世界から影響を受け、その影響下に自己を形成し、そして再びこの歴史的世界に作用しかえす」(G.S. VII, 248)という作用連関において、個人にのみ妥当する意味は次第に共同性、普遍性を帯びたものへと転化する。この創造された意味のもつ共同性の体験を媒介にしてさらに意味が形成されるといふ、作用連関の展開のうちで、生の個別的表現は絶えず止揚されて一層の共同性、普遍性を実現するのである。そして、この作用連関における表出された共同性という点に、理解ないし認識成立の可能性があるのである。「個々の生の表出はいずれも、この客観的精神の國においては、ある共同的なも

のをいいあらわしている。すべての言語、すべての文章、すべての身振りや礼儀、すべての芸術作品、すべての歴史的行為が理解可能となるのは、共同性がそれらにおいて自己を表出する者と理解する者とを結びつけているからにはかならない。個々人はつねに共同性の領域において体験し、考え、行動するのであって、この領域においてのみ理解するのである」(G.S., VII, 146f)。

歴史的世界を或る絶対理念から規制的に構成することを拒否して、歴史内在主義の立場から構成しようとするデイルタイにとって、この作用連関の思想は核心をなす原理である。全体的生は、現実的には創造的作用連関としてあらわれている。生とは作用連関である。個々人は時代精神と共同精神に浸された歴史的個人であり、それらの価値定立、目的実現による歴史的世界においておりなす作用連関そのものを、或る理念を前提して構成するのではなく、それ自体において理解すること、しかも、作用連関の内在的形成作用と形成されたものとの意味論的同一性において、そこから「あらゆる概念的思考を駆使して、固定したもの、不変なものを取り出すこと」(G.S., VII, 146) ことが精神的世界の構成の根底をなしている。この歴史内在の立場を徹底していくかにも見えるデイルタイの歴史認識は、しかしながら、なおいくつかの問題を残しているように思われる。

四

生はわれわれに対して、それ自体として全体的に与えられていない以上、生の世界は或る理念として形成されざるをえないが、デイルタイにおいては、それが作用連関であった。作用連関は生の現実であると共に、学の対象でもあり、また方法概念でもある。しかし、デイルタイの思想の核心をなすこの生と作用連関、およびこれによって形成された構想は、次のような問題を含むものであった。

(一) 作用連関の意味形成は、歴史的世界においていわば無限に続く運動であるといえる。ところが生の客観態は生のこの不断の運動の固定であるかぎり、その場合には客観的知は可能となりうるものの、生の生動的運動を疎外することになる。またこの運動をそのままに把握しようとするかぎり、作用連関における歴史的世界の構成は完結しない。というのも、生そのものが閉じられ完結したものではないからである。デイルタイの場合には、生の運動と生の固定の間を揺れ動きつつ、結局は、生の運動を生を固定し生を客観態のうちにとりこみ、そして、生の客観態についての認識の拡大が客観的普遍的知を可能にするという主旨であるが、それは生の近似的理解にはかならない。「われわれは、ただ絶えず

る接近という形でしか生を理解しない」(G.S. VII, 236)のである。デイルタイ自身が「相対性から全体性へ」の途上にいることを知っていたのである。⁽¹⁰⁾これは歴史主義の問題ともいえるが、それにとどまらず、歴史と哲学の間を、歴史を徹底していくことで解決しようとする場合の重大な問題を提起しているように思われる。

(二) このことはまた、全体と部分の問題とも重なってくる。生の客観態の把握とは、全体的生を部分として把握することである。全体を予想しつつ理解することが、部分の認識の前提条件となるが、しかし、部分を認識しなければ全体は明らかにならない。この全体と部分の「循環」(Zirkel)は、どのように解決されるのであろうか。またこのことは、デイルタイの掲げる方法、すなわち「理念的体系的構成と歴史的方法」の問題にも重なってくる。デイルタイは「理念構成と歴史的知识とは相互に影響を及ぼす。歴史的知识が発展した経過は、この世界の理念構成を理解するための手がかりを与え、理念構成は歴史の理解を深める」(G.S. VII, 86)と語るが、この場合にも理念と歴史の循環がある。デイルタイはこのような循環を、部分的相対性としての歴史からその基層にまで進み、そこにおいて部分と全体の結合である「汲み尽しがたき創造的実在性」⁽¹¹⁾としての生と作用連関に還帰することによって解決しようとした。「作用連関は、一と多、全体と部分、構成作用と相互作用の関係によって汲み尽されない特別な性質を示す」(G.S. VII, 159)。しかし、デイルタイがこうして還帰してくる生ないし作用連関は、デイルタイのめざす客観的知——ガダマーはこれを「デイルタイを魅惑している認識論的デカル主義」とよんでいる——の対象となりうるのであろうか。

(三) 全体と部分によっては汲み尽されない生ないし作用連関の尽されがたさは、さらに、デイルタイにおいて「生」概念の二義性の問題にかかわってくる。シュルツはデイルタイの「生の哲学」を「生の形而上学」とよんでいる。そして、生は「デイルタイにとって根源という意味での原理」であるが、その「生という概念は二義的であることを免れていない」と述べて、生は一方で単に「個人の生」でありながら、他方「まさしく原理という意味で、単に個人的な成長過程の根源であるばかりか、同時に、またとりわけ、人生の表現Vである包括的な秩序連関の根源として評価される」と語るのである。⁽¹²⁾生が個的生を表わすと共に、形而上学的な起源概念としても用いられているという二義的性格である。ところで、この生の二義性が個(部分)と普遍(全体)の関係を不明瞭なものにしているといえるのである。というのは、個は、作用連関そのものにおける社会的連続的な共同的生という全体に関係するものであるようにみえつつ、他方、この共同的生をさらに根源において基礎づけている、いわば基体的生という全体に関係するようにもみられるからである。ここでは、生が二様の層において想定されているということ

はなく、生そのものが二重の意味内容を帯びているということである。デイルタイは、体験、表現、理解という三肢構造をもつ生の、その裏側にまわることを拒否して、歴史内在的立場から生の学的把握をめざした。しかしこの生が、単に部分の集積においては到りえない「汲み尽しがたき」全体という、いわば汎神論的形而上学的性格をも含んでいて、そのために、生の学的把握の客観性がこの生の二義性におびやかされるといふ面をもつのである。

デイルタイにおけるこの生の二義性の背景には、おそらくフィヒテの「自我」概念、あるいはヘーゲルの「生」の概念の影響があるように思う。事実、デイルタイは多くの個所でフィヒテの「自我」に言及し、それを独創的な概念だと強調して、例えば「自我は実体、存在、所与ではなく、生、活動、エネルギーとして現われる。また彼はすでに、歴史的世界のエネルギー概念を形成していた」(G.S. VII, 157)と語っている。他方また、自己の精神科学の新しい構想に着手しはじめたとき、フッサールと並んで集中的に研究した初期ヘーゲル哲学の「生」の概念が、ヘーゲルの哲学にひそむ形而上学的性格を強く批判したにもかかわらず、やはりデイルタイの「生」に大きな影を落としているように思う。「生は一なる神性の中にあるがゆえに、生が生から別れて別のものになることはない」とヘーゲルは語ったが、ヘーゲルにおいては、生は単なる個別的生ではなく、主観と客観の根底にあつてこれらに浸透し作用して統合する汎神論的基体といったものである。もちろんこの汎神論的な生概念を、そのままデイルタイの「生」に重ね合わせることはできないが、デイルタイがそこに或る共感を示したことは想定できる。ノールは、デイルタイの『ヘーゲルの青年時代』に付した「序文」の中で次のように語っている。『精神科学序説』とそこから生まれた一連の研究とは、やはり一貫して彼をヘーゲルに向かわせることになった。形而上学の、とりわけ発展史的汎神論の歴史と、歴史的意識の構成の成立史とは、ヘーゲルの立場の理解という課題において重なり合うものであった」(G.S. IV, V)。このヘーゲル論の中でデイルタイが、体系以前の若きヘーゲルの歴史構造を、とりわけ「生」に注目して、全一なる生が分裂した現実態となって再び自己に還帰する運動を本質とした「生の歴史」として特徴づけていることは、注目に値するといえる。少なくとも、デイルタイの「生」が、フィヒテの「自我」やヘーゲルの「生」のもつ形而上学的性格を完全に払拭しているか否かを問わざるをえないことが、歴史内在的認識の徹底と確立というデイルタイの立場を問題をはらむものにしていくといえるのである。

(四) 前述のように、デイルタイの歴史認識の問題は、結局は客観的精神の「類型」の学にいきつかざるをえなかった。ガダマーはデイルタ

イの言葉「単語の文字のように、生と歴史は一つの意味をもっている」(G.S., VII, 219)を引き合いに出して「結局デイルタイにおいては、歴史的過去の研究とは歴史的経験としてではなく、解明 (Erzifferung) として考えられている」と語っている。生と歴史は、一冊の書物のように「理解」され解読されるべき対象である。デイルタイにとって問題なのは、生の表現であり、表現の理解である。生の理解は生の表現の理解であって、生あるいは体験それ自体は「歴史的世界の原細胞」(G.S., VII, 161)ではあっても、そこには、それが自己を表出して表現に到るプロセスは稀薄である。歴史認識者が同時に歴史的存在であることによって、歴史認識は自己認識であるという視座において形成されたデイルタイの歴史内在主義は、一方でその豊かな内容を提示したにもかかわらず、しかしそれが歴史の解読ないし解明という発想の中で、人間の自己表出という創造的活動の認識を稀薄化しているのである。したがって、生の体験が自己を表現して客観的精神を表出していく、その自己表出が、例えばヘーゲルのように、一つの疎外であることを提示してはいない。ヘーゲルは絶対精神という普遍的理念の導入によって、歴史的世界における自己表出がつねに疎外関係としてあらわれることをみていた。しかしデイルタイにおいては、客観的精神は解読の対象となる生の客観的形態、すでに形成された形態として平板化されていて、そこでは、その形成過程そのもの、あるいは主観的精神と客観的精神、体験と表現のうちに展開されるダイナミズムの構造は捨象されているといわざるをえない。ここにデイルタイの静寂主義があるといえる。

デイルタイの作用連関を核心とする歴史把握は、ヘーゲルの観念論的歴史観を否定した最初の内在的歴史観の一つとして積極的な意味をもつものであるが、そこで提起されている諸問題がさらに、歴史認識と解釈学の可能性といった包括的な観点に立つとき、いかなる位相にあるのかを見きわめるような試みを、改めて考えてみたいと思っている。

註

- (1) Manfred Riedel, Einleitung. In: Wilhelm Dilthey, Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften, Suhrkamp, 1981, S. 54.
- (2) Michael Ermarth, Wilhelm Dilthey: The Critique of historical reason, The Univ. of Chicago press, 1975, p. 37-90
- (3) M. Ermarth, ebenda, p. 59.
- (4) M. Ermarth, ebenda, p. 185

- (5) 茅野良男「ウィルヘルム・デイルタイと歴史の問題」(『哲学雑誌』七二卷七三二号所収)参照。
- (6) Hans-Georg Gadamer, *Wahrheit und Methode*, J. C. B. 1975, S. 211ff. なおフッサールとデイルタイの関係について、「三島憲一」現象学と哲学的解釈学」(『講座・現象学(3)』所収)ではフッサールの側からの詳細な検討がなされている。
- (7) E・フッサール『論理学研究』2 (立松他訳、みすず書房) 四八—四九頁。
- (8) H-G. Gadamer, op. cit., S. 212
- (9) H-G. Gadamer, ebenda, S. 212
- (10) H-G. Gadamer, ebenda, S. 223
- (11) H-G. Gadamer, ebenda, S. 217
- (12) W・シヤンツ『変貌した世界の哲学』3 (中壘華他訳、二玄社) 八四—八五頁。
- (13) Herman Nohl, *Hegels theologische Jugendschriften*, Minerva, 1966, S. 280
- (14) H-G. Gadamer, op. cit., S. 228

* なお、デイルタイ全集 (Wilhelm Dilthey Gesammelte Schriften, B. G. Teubner Verlag, Stuttgart—G. S と略記—) からの引用は、本文中に巻数・頁数の順序で示した。

【追記】『デイルタイ全集』第十九巻が最近刊行され、注目されている。Helmut Johach と Frithjof Rodi の編集になるこの巻の特色は、デイルタイの予告にもかかわらずその実体が必ずしも明らかでなかった『精神科学序説』第二巻の輪郭が、かなり明確な形で提示されていることである。この新しい資料によって、この『序説』第二巻の中断から晩年の思想に到る、歴史的理性批判の形成のプロセスが、改めて明らかにされ、また、これに関する従来の学説は何ほどか再検討をせまられることになるかもしれない。なお本稿では、この第十九巻の入手が脱稿後のことであったので、これを参照することはできなかった。

また、デイルタイ研究の上で注目すべき点とは、今度新たに『デイルタイ年報』が刊行されたことである。その第一巻が昨年刊行された。

(Vgl. Wilhelm Dilthey Gesammelte Schriften, Bd. XIX [Grundlegung der Wissenschaften von Menschen, der Gesellschaft und der Geschichte], Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1982. Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften, Bd. 1, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1983)

Diltheys Konzeption der Kritik der historischen Vernunft (II)

—Die Aporien des Standpunktes der geschichtlichen Immanenz—

Tatsuo MIZUNO

Diltheys Plan der psychologischen Grundlegung der Geisteswissenschaften, die er seit "Einleitung" (1883) entworfen hatte, wandte sich nach der Veröffentlichung der "Ideen" (1894). Im Prozeß dieser Wendung, wo er sich der Grenzen der psychologischen Grundlegung bewußt war, und den neuen Umriß der Kritik der historischen Vernunft schließlich in dem "Aufbau" (1910) zu zeigen gekommen ist, hat es Diltheys Plan einen Einfluß gegeben, daß er die Philosophie von Husserl und Hegel, besonders Bedeutungslehre von Husserl und Hegels Begriff "Leben" angenommen hat. Diese Annahme förderte seinen Plan zur neuen Form zu bilden, aber zugleich macht sie auch seine spätere Konzeption problematisch.

Nun suche ich in diesem Essay das Problem und die Besonderheit in der Diltheys Konzeption, die von der Annahme dieser beiden Philosophien charakterisiert ist.